「恋の詞」と蕉風俳諧

清登典子

はじめに

和歌において「恋」が主要なテーマの一つであったように、和歌で培われた美意識を基盤とする連歌においても、「恋」は「月」や「花」などと同様に百韻一巻中に必ず詠むべき重要な題材とされた。そして連歌を源流として江戸時代に広く行われるようになった俳諧（連句）においても「恋」の重要性は変わることがなかった。

ただし、俳諧における恋句の内容やその詠みぶりは、和歌、連歌のそれとは大きく異なる面を持つものでもあった。そうした俳諧における「恋」の在り方をよく示すと考えられるものに「恋の詞（ことば）」がある。「恋の詞」とは、連歌・俳諧の用語で、それを用いることで恋の句と認定される語句のことである。このうち俳諧に用いる「恋の詞」については、近世初期の貞門俳人たちによって出された俳諧作法書類の多くに掲載されていたことが知られている。

本稿では、近世初期俳諧における「恋の詞」の分析を通じて俳諧における「恋」の特色を探ることとしたい。また、芭蕉が確立した蕉風俳諧における恋の句についても「恋の詞」の用い方に注目して検討を加えることで、その詩的達成のあり方を明らかにしたいと思う。

一、「恋の詞」の分析

近世俳諧に用いられる「恋の詞」についてはかつて調査を行ったことがあり、次に挙げる寛永期から元禄期に

出された十種の俳諧詞寄せ、俳諧作法書類に「恋の詞」が掲載されていることを確認した。[1]

①『はなひ草』立圃著　寛永十三年（一六三六）
②『俳諧初学抄』徳元著　寛永十八年（一六四一）
③『毛吹草』重頼著　正保二年（一六四五）
④『俳諧御傘』貞徳著　慶安四年（一六五一）
⑤『世話焼草（世話尽）』皆虚著　明暦二年（一六五六）
⑥『便船集』梅盛著　寛文九年（一六六九）
⑦『俳諧番匠童』如泉著　元禄二年（一六八九）
⑧『俳諧糸屑』轍士著　元禄七年（一六九四）
⑨『俳諧寄垣諸抄大成』鷺水著　元禄八年（一六九五）
⑩『をだまき綱目大成』竹亭著　元禄十年（一六九七）

今回の「恋の詞」の分析にあたっては、右の十種の俳諧作法書類に取り上げられている「恋の詞」全九三四語（いくつかの作法書類に重複して取り上げられている語は一語として数えた）を分析対象とすることにした。[2]

まず、俳諧の「恋の詞」のうち、雅語（和歌、連歌に用いる語）からなる「恋の詞」と、俳言（はいごん）（和歌、連歌に用いられない語）からなる「恋の詞」の割合を調べたところ次のような結果が出た。

A　雅語からなる「恋の詞」　412語（約44％）
B　俳言からなる「恋の詞」　522語（約56％）

A「雅語からなる「恋の詞」」とは、たとえば「うらみ」「かこつ」「ちぎり」「ものおもひ」などであり、基本

的に和歌の恋の歌に用いられ、連歌の「恋の詞」としても用いられることの多い、伝統的な「恋の詞」である。注意したいのは、こうした伝統的な「恋の詞」が俳諧の「恋の詞」としても多数用いられ、その割合が全体の四割以上を占めていたということである。俳諧が滑稽な連歌の意の「俳諧之連歌」の略称であり、その出発点から卑俗、滑稽を特色としていたことを考えると、予想以上に雅語からなる「恋の詞」の割合が大きいように見えるが、実は和歌や連歌が雅語のみを用いなければならないという用語上の制約のある文芸であるのに対して、俳諧は雅語も俳言も両方を用いることができるという用語上の自由さに文芸上の特色があるのであり、「恋の詞」の面でもそうした特色が発揮された結果として捉えることができるだろう[3]。

つぎにB「俳言からなる「恋の詞」」について見ていきたい。俳言は和歌、連歌には用いることの出来ない語句であるから、俳言からなる「恋の詞」こそ近世文芸としての俳諧の恋の特色を端的に示すものと考えられるが、子細に検討すると、同じ俳言といっても表現や内容からいくつかの種類に分けることができることに気付かされた。そこで以下に六種に分類した上で、それぞれの種類ごとに考察していくことにしたい。なお、いくつかの種類にまたがる語句については重複してカウントした。したがって六種の合計数は俳言の「恋の詞」の総数五二二語を超える結果となっている。

ア	漢語（音読み語）	153語
イ	人名	65語
ウ	口語・俗語	216語
エ	身体関連語	45語
オ	婚姻・出産関連語	40語
カ	近世風俗関連語	104語

ア「漢語（音読みの語）」の「恋の詞」としては、「約束」「怨念」「傾城」「遊女」など一五三語が挙げられる。

漢語は基本的に和歌、連歌では使用できない語だが、意味的には雅語と通じるものも含まれている。たとえば「約束」は雅語「ちぎり」と、「怨念」は雅語「うらみ」と同様の意味を示す漢語である。このような語は、俳言ではあっても伝統的な「恋の詞」に通じる語と言えるだろう。一方、イの人名（「楊貴妃」「王昭君」など）や、オの婚姻・出産関連語（「婚礼」「懐妊」など）、カの近世風俗関連語（「傾城」「遊女」など）にも多くの漢語（音読み語）の「恋の詞」が存在しており、幅広く用いられていることが確認できた。

イ「人名」に分類した「恋の詞」としては、「業平」「源氏」「虞美人」「西施」など日本および中国の古典作品における恋の故事で知られる人名六十五語が挙げられる。これらの人名を詠む場合には当然のことながら故事や逸話を踏まえた句作りが求められるので、イは古典的知識教養に基づく「恋の詞」としての側面も持つと言えよう。

ウ「口語・俗語」の「恋の詞」には、「くどく」「ほるる」などの口語、俗語のほか「鬼も十八」「夜目遠目笠の内」などのことわざも含めた。「口語・俗語」の「恋の詞」は俳言の「恋の詞」の中でも最も多い二一六語が挙げられており、俳言による「恋の詞」の大きな柱となっていると捉えられる。

エ「身体関連語」には、「腰」「小指きる」など身体の一部を具体的に挙げた「恋の詞」四十五語が挙げられる。決して多い数ではないが、和歌、連歌では身体を直接に詠むことがまれであり、こうした具体的な身体関連語を詠む点に俳諧の「恋の詞」の特色を見ることが出来る。

オ「婚姻・出産関連語」としては、「なかふど（仲人）」「婚礼」「つはりやみ」「子もち」など四十語が挙げられる。こうした語を「恋の詞」として句中に詠み込むこと自体が、和歌、連歌における「恋」の概念からは外れるものであり、特に出産関連語を「恋の詞」とする点に俳諧における「恋」の独自性が窺える。

カ「近世風俗関連語」としては、「吉原」「すひつけたばこ」などの遊郭に関する語や「若衆」「念者」などの衆道関係の語など合わせて一〇四語が挙げられる。金銭を媒介とする男女の関係あるいは男性同士の関係に関わる語を「恋の詞」とする点も俳諧の「恋の詞」の特色と捉えることができる。

以上、俳言による「恋の詞」についての分析の結果をまとめてみると、ア「漢語（音読み語）」には和歌、連歌で用いられてきた伝統的な「恋の詞」に意味上で通じるものが含まれており、イ「人名」には和漢の古典的知

識に基づく恋の故事で知られる人名が含まれるなど、俳言による「恋の詞」の中にも和歌、連歌の「恋」の世界と通じる「恋の詞」が存在していることがわかった。これに対してウからカに分類された「恋の詞」は、伝統的な「恋の詞」とは異なる近世的な恋の特色を示す「恋の詞」であり、内容的には身体、婚姻・出産、近世風俗など伝統的な「恋」の世界では排除されてきた素材、表現が取り上げられている点が注目される。これらの素材、とくに婚姻・出産関連語を「恋の詞」として取り上げることは伝統的な恋の捉え方とは大きく異なるものである。ここから浮かび上がるのは、「恋」を精神的なものとしてのみ捉えるのではなく、身体、社会、風俗との関わりの中で現実的に捉えようとする態度である。実はこうした現実的な態度、眼差しこそ俳諧のみならず近世文学全般の特色と言えるものである。そのことは、たとえば西鶴の浮世草子の世界などを想起すればよく了解されるだろう。そして、談林俳諧の旗手として活躍していた西鶴が浮世草子という散文に手を染めたことに象徴されるように、現実的な眼差しと素材とは散文表現にふさわしいものでもあった。こうした散文表現にふさわしい素材を用いながら、それを詩として表現していこうとする点に、近世の詩としての俳諧の課題があったとも考えられるのである。

二、蕉風俳諧における恋の句

前節における「恋の詞」の分析結果を受けて、本節では芭蕉が確立した蕉風俳諧（連句）作品中の恋句における「恋の詞」の用いられ方について検討する。

従来、蕉風俳諧における恋の句については、「蕉風に至って「むかしの句は、恋の詞を兼ねて集め置き、その詞をつづり、句となして、心の恋の誠を思はざる也」（『三冊子』）と、詞の恋は否定され、心の恋がもっぱらとされるようになった」と説明されている[4]が、実際のところはどうなのであろうか。「恋の詞」は本当に用いられなくなったのだろうか。もし用いられている「恋の詞」があったとすれば、どのような「恋の詞」であり、その用い方には何か特色が見られるのだろうか。このような点に留意しながら、以下、「芭蕉七部集」と呼ばれる蕉

風俳諧の代表的撰集七部を取り上げ、各撰集に収載の連句作品のうち芭蕉が一座した歌仙における恋の句を対象として検討を加えていくことにする。ただし、芭蕉七部集の二番目の撰集である『春の日』には、芭蕉一座の連句作品を収載していないので、ここでは『冬の日』『あら野』『ひさご』『猿蓑』『炭俵』『続猿蓑』の六部の集を取り上げていく。

①『冬の日』

まず、蕉風確立の撰集と言われる『冬の日』から見ていくと、同書には貞享元年（一六八四）冬に芭蕉が尾張の俳人たちと巻いた五歌仙が収められるが、そのすべての歌仙において恋の句が詠まれていた。それぞれの歌仙について、その興行年次と季節、歌仙中の恋の句の数[5]、および前節で取り上げた俳諧作法書類に掲載の「恋の詞」の使用される句数を示した。さらに「恋の詞」を使用する句のうち、雅語による「恋の詞」を用いる句数、俳言による「恋の詞」を用いる句数について調べた結果を括弧内に示した。

「狂句こがらしの」歌仙　貞享元年冬　恋句4（「恋の詞」使用4（雅語「恋の詞」3・俳言「恋の詞」1）
「はつ雪の」歌仙　貞享元年冬　恋句5（「恋の詞」使用5（雅語「恋の詞」3・俳言「恋の詞」2）
「つつみかねて」歌仙　貞享元年冬　恋句6（「恋の詞」使用6（雅語「恋の詞」4・俳言「恋の詞」2）
「炭売りの」歌仙　貞享元年冬　恋句7（「恋の詞」使用7（雅語「恋の詞」6・俳言「恋の詞」1）
「霜月や」歌仙　貞享元年冬　恋句2（「恋の詞」使用2（雅語「恋の詞」2・俳言「恋の詞」0）

注目されるのは、『冬の日』収載の五歌仙における恋の句、計二十四句のすべてに「恋の詞」が用いられており、そのうち十八句に雅語の「恋の詞」が用いられていたことである。これは俳言の「恋の詞」を用いた句数六句の三倍にあたる。『冬の日』収載歌仙では予想以上に「恋の詞」が用いられていたこと、とくに雅語からなる「恋の詞」が用いられていたことを確認することができた。恋句の内容は物語的世界における恋を詠むものが目立っていた。

たとえば

髪はやすまをしのぶ身のほど　　芭蕉
いつはりのつらしと乳をしぼりすて　　重五　（「狂句こがらしの」歌仙八句目、九句目）

では、何らかの事情で髪を切り、それが元に戻るまで世間から隠れ住む人物を詠んだ前句に、男に裏切られ生まれた子を他人の手に渡し、自分の乳をしぼっては捨てている女（還俗した尼僧など）の哀れな様子を詠んだ句が付けられており、「しのぶ」「いつはり」「つらし」などの雅語からなる「恋の詞」が用いられる一方で、「恋の詞」ではないが俳言の「はやす」「乳」などの口語や身体語が組合わされることで、物語的世界に具体性、身体性が与えられている。一方では、

初はなの世とや嫁（よめり）のいかめしく　　杜国
かぶろいくらの春ぞかはゆき　　野水
櫛ばこに餅すゆるねやほのかなる　　かけい　（「はつ雪の」歌仙十七句目～十九句目）

のような付け合いも見え、談林俳諧の余風ともいうべき近世風俗への眼差しが示されていることに注意したい。

②『あら野』

『あら野』に収まる芭蕉一座歌仙は元禄元年（一六八八）秋に興行された一巻のみであった。『冬の日』の場合と同様に、恋の句の数、「恋の詞」の使用状況についての調査結果を示す。

「雁がねも」歌仙　　元禄元年秋　恋句7　「恋の詞」使用7（雅語「恋の詞」7・俳言「恋の詞」0）

ここでも恋の句七句のすべてに「恋の詞」、それも雅語からなる「恋の詞」が用いられていた。俳言による「恋の詞」がまったく用いられていなかったことからも、『冬の日』以上に古典的物語的な恋の句が多いと言えるだろう。そのことは、芭蕉の恋句として有名な次の付け合いからも窺える。

きぬぎぬやあまりかぼそくあてやかに　芭蕉
かぜひきたまふ声のうつくし　越人　（「雁がねも」歌仙十三句目、十四句目）

一夜を過ごした翌朝の女性の繊細で上品な姿を詠んだ芭蕉の句は、物語の一場面を思わせるものであり、それを受けた越人の句は風邪をひかれた声が愛おしく感じられるというものだが、「ひきたまふ」と敬語を用いることで女性の身分の高さを表現しており、まさに王朝物語の世界を思わせる。芭蕉の句には俳言が用いられておらず一句がすべて雅語のみで詠まれている。『あら野』には、こうした雅語のみで詠まれている句がこの句も含めて三句あり、恋句の古典的な詠まれ方を示している。

③『ひさご』

『冬の日』『あら野』は『奥の細道』の旅の前に出された撰集であったが、『ひさご』は『奥の細道』旅後に出された集であり、芭蕉一座の歌仙作品として元禄三年春に巻かれた「木のもとに」歌仙を収める。恋の句の数、「恋の詞」の使用状況は次のようであった。

「木のもとに」歌仙　元禄三年春　恋句4　「恋の詞」使用4（雅語「恋の詞」4・俳言「恋の詞」0）

『あら野』に収まる「雁がねも」歌仙の場合と同様、恋の句四句すべてに雅語からなる「恋の詞」が用いられていた。ちなみに四句のうち句中に俳言が全く見られず雅語のみで詠まれている句が二句あり、この点でも先に見た『あら野』収載の「雁がねも」歌仙における恋句と近いものが感じられる。ただし、「木のもとに」歌仙にはここまでの調査では見られなかった新しい詠みぶりの句も見られた。それは、

ほそき筋より恋つのりつゝ　曲水
物おもふ身にもの喰へとせつかれて　芭蕉　（「木のもとに」歌仙十二句目、十三句目）

という付け合いである。特に芭蕉の句は、恋の物思いで食事ものどを通らない人物が、それと気付かぬ周囲の者

からさあ食べろ食べろとせっつかれて困惑しているさまを詠んだもので、「物おもふ」という雅語の「恋の詞」と「もの喰へ」「せつく」という俳言とを合わせ用いることで、生活実感の漂う恋の一場面が描き出されている。これまでの物語的、古典的な恋とは異なる新しい視点に立った恋句と言えるだろう。

④『猿蓑』

『猿蓑』は『奥の細道』の旅後に出された蕉風俳諧の代表的撰集であり、「俳諧の古今集」とも呼ばれる。収載される芭蕉一座歌仙における恋の句、「恋の詞」についての調査結果は次のようであった。

「鳶の羽も」歌仙　元禄三年冬　恋句２　「恋の詞」使用２（雅語「恋の詞」２・俳言「恋の詞」０）
「市中は」歌仙　元禄三年夏　恋句４　「恋の詞」使用４（雅語「恋の詞」２・俳言「恋の詞」２）
「灰汁桶の」歌仙　元禄三年秋　恋句４　「恋の詞」使用４（雅語「恋の詞」４・俳言「恋の詞」０）

ここまでの三撰集と同様に、すべての恋の句に「恋の詞」が用いられており、中でも雅語による「恋の詞」が多くを占めており、やはり古典的、物語的な恋句の詠み方が示されている。『猿蓑』収載連句中の代表的な恋の句としては

さまざまに品かはりたる恋をして　凡兆
浮世の果は皆小町なり　芭蕉　（「市中は」歌仙三十一句目、三十二句目）

が挙げられる。さまざまな相手とのさまざまな恋の閲歴を回顧するという内容の凡兆の句を受けて、浮き世狂いの果ては誰もみな老衰の小町と同じ定めであると詠んだ芭蕉の句は、具体的な恋の場面からは離れ、この世の実相を捉えた「観相」の句としての深みを示しており、門人の其角が「此の句のさびやう、作の外を離れて、日々の変にかけ時の間の人情にうつりて、しかも翁（芭蕉）の衰病につかれし境界にかなへる所、誠にをろそかならず」（『雑談集』）と高く評価したことも頷ける。

⑤『炭俵』

『炭俵』は芭蕉晩年の俳風「かるみ」を代表する撰集として知られる。収載の芭蕉一座歌仙三巻における恋の句、「恋の詞」についての調査結果は次のようであった。

「むめがゝに」歌仙　元禄七年春　恋句３「恋の詞」使用２（雅語「恋の詞」０・俳言「恋の詞」２）
「空豆の」歌仙　元禄七年夏　恋句２「恋の詞」使用１（雅語「恋の詞」１・俳言「恋の詞」０）
「振売りの」歌仙　元禄六年冬　恋句２「恋の詞」使用２（雅語「恋の詞」２・俳言「恋の詞」０）

注目したいのは「恋の詞」を用いない恋の句が今回の調査の中で初めて登場することである。すなわち、「むめがかに」歌仙の

隣へも知らせず嫁をつれて来て　野は
屏風の陰にみゆるくはし盆　芭蕉（「むめがゝに」歌仙三十五句目、三十六句目）

という付け合いにおいて、芭蕉の詠んだ三十六句目の句には、「恋の詞」がまったく見られず、世間に知らせずにこっそりと祝言をあげたという前句の内容を踏まえ、新枕を交わした翌朝の情景として枕屏風の陰に見える菓子盆を詠んだものである。一句だけでは恋の句とはならないが、前句の内容と合わせることで恋の意がくみ取れる句であり、「心の恋」の句と言えるだろう。『三冊子』においても「さもありつべき事を直に事もなく付けたる句」であり「心の付けなし新しみあり」と、その新しさが評価されている。

また、『炭俵』には、歌仙中の恋の句が一句のみで読み捨てられている例が三例見られた。そのうちの一例を前後の句とともに示す。

雪の跡吹はがしたる朧月　孤屋
ふとん丸げてものおもひ居る　芭蕉

不届な隣と中のわるうなり　岱水　（「空豆の」歌仙十七句目～十九句目）

芭蕉の句は「ものおもひ」という雅語の「恋の詞」を用いた恋の句だが、その前の孤屋の句は春の月を詠んだ景気句であり、芭蕉句に付けた岱水の句も「ものおもひ」の原因として隣家との仲の悪さを設定した恋離れの句で恋の句とはならない。したがって十八句目の芭蕉の句のみが恋の句として一句で詠み捨てられていることになる。こうした詠み方については他門からの批判もあったようで、『去来抄』には、他門から「蕉門、恋を一句にても捨つるはいかに」と問われた去来が芭蕉に問うたところ、「予（芭蕉）が一句にても捨てよといふも、いよいよ大切におもふ故なり。（略）大切なるゆゑ、みな恋句になづみ、僅かに二句一所に出れば幸とし、却って巻中恋句希也。（略）此の故に恋句出て付けよからん時は二句か五句もすべし、付けがたからん時はしひて付けずとも一句にても捨てよといへり。かくいふも何とぞ巻面（まきづら）のよく、恋句も度々（たびたび）出よかしと思ふゆゑ也」との答えを得たことが記されている。すなわち、大切な恋の句であるために恋句が出るとそこで句作が停滞し一巻が不出来となることもあるため、一巻中に恋句を何度も出したいと願い、付けづらい時には無理をせず一句で捨てよというのである、と答えたという。「芭蕉七部集」においては、『炭俵』と『続猿蓑』の二集に収載の歌仙において一句捨ての恋句が見られた。先に見た「恋の詞」を用いぬ恋の句も含め、『炭俵』収載の歌仙における恋の句は蕉風俳諧の恋の詠まれ方の転換点を示すものと捉えられる。

⑥『続猿蓑』

『続猿蓑』は芭蕉没後の元禄十一年に出された撰集であるが、元禄六年、七年に巻かれた芭蕉一座歌仙三巻を収載する。それぞれの歌仙における恋の句、「恋の詞」についての調査結果は以下のようであった。

「八九間」歌仙　元禄七年春　恋句３「恋の詞」使用３（雅語「恋の詞」２・俳言「恋の詞」１）
「猿蓑に」歌仙　元禄六年冬　恋句３「恋の詞」使用１（雅語「恋の詞」０・俳言「恋の詞」１）
「夏の夜や」歌仙　元禄七年夏　恋句４「恋の詞」使用３（雅語「恋の詞」２・俳言「恋の詞」１）

「恋の詞」を用いない恋の句が三句、一句で捨てられている恋の句が二句あるなど、『続猿蓑』収載の芭蕉一座歌仙の恋句には、『炭俵』で見たのと同様の傾向が窺えた。しかも、『続猿蓑』における恋の句は、『炭俵』収載の歌仙中の恋の句と比べても恋の心が弱いという特色が見られた。たとえば、

　　聟が来てにつともせずに物語　　支考
　中国よりの状の吉左右　　惟然　（「猿蓑に」歌仙九句目、十句目）

を見ると、両句ともに「恋の詞」は用いられておらず[6]、内容も聟がやってきてにこりともせずに物語るという前句に、聟が語ったこととして中国地方から届けられた書状に記されていた良い知らせを付けたものであり、全体として恋の心の詠み込まれた付け合いとは呼びがたいものとなっている。

また、一句捨ての恋の句二例は、

　　なれぬ嫁にはかくす内証　　沾圃　（「八九間」歌仙二十六句目）
　後呼（のちよび）の内儀は今度屋敷から　　支考　（「猿蓑に」歌仙二十一句目）

というものであり、どちらも「嫁」「後呼」という俳言の「恋の詞」を用いてはいるが、嫁いだばかりの嫁には家の財政事情などを隠しておくという沾圃の句も、今度の後妻は武家屋敷に仕えていた女性を迎えたものだという支考の句もどちらも恋の心の弱い句となっている。

『続猿蓑』収載の芭蕉一座歌仙は、「恋の詞」を用いないと同時に、恋の心、恋の情の薄い句が多く見られ、歌仙一巻における恋の句の存在感が弱まっていると言えるだろう。

三、まとめ

ここまで「芭蕉七部集」に収録される芭蕉一座歌仙における「恋の詞」の使い方について検討してきたが、ここで撰集ごとおよび七部集合計の調査結果をまとめると次のようになる。

『冬の日』　恋句24句　「恋の詞」使用句24（雅語「恋の詞」18・俳言「恋の詞」6）
『あら野』　恋句7句　「恋の詞」使用句7（雅語「恋の詞」7・俳言「恋の詞」0）
『ひさご』　恋句4句　「恋の詞」使用句4（雅語「恋の詞」4・俳言「恋の詞」0）
『猿蓑』　恋句10句　「恋の詞」使用句10（雅語「恋の詞」8・俳言「恋の詞」2）
『炭俵』　恋句7句　「恋の詞」使用句5（雅語「恋の詞」3・俳言「恋の詞」2）
『続猿蓑』　恋句10句　「恋の詞」使用句7（雅語「恋の詞」4・俳言「恋の詞」3）
七部集合計　恋句62句　「恋の詞」使用句57（雅語「恋の詞」44・俳言「恋の詞」13）

七部集に収載の芭蕉一座歌仙中の恋の句は合計で六十二句あったが、そのうち「恋の詞」が用いられている句が五十七句あり、九割以上を占めた。特に『冬の日』から『猿蓑』までの四撰集においては、すべての恋句に「恋の詞」が用いられていた。『炭俵』『続猿蓑』に収載の晩年の連句作品においては、「恋の詞」を用いない恋句も見られたが、それでもそうした句は二つの集に見られる恋句全体の三割程度にしか過ぎない。先に見たように蕉風俳諧の恋の句の特色として「詞の恋の否定と心の恋の確立」ということが従来から言われてきているが、七部集に収載される歌仙を見る限り、「詞の恋の否定」の傾向を示すのは晩年の歌仙を収録する『炭俵』『続猿蓑』に限られた。また、「恋の詞」を用いない恋句が「心の恋の確立」とただちに結びつくとも言えず、『炭俵』収載歌仙中にはそうした句例もあるものの、『続猿蓑』では、「恋の詞」の使用が減ると同時に恋の心の弱い句が多くなる傾向が見られた。

つぎに使用されている「恋の詞」について詳しく見てみると、「恋の詞」を用いている五十七句のうち、雅語からなる「恋の詞」を用いたものが四十四句、俳言からなる「恋の詞」を用いたものが十三句と、圧倒的に雅語からなる「恋の詞」を用いる句が多かった。ここからは蕉風俳諧の恋の句が伝統的な恋の本意を踏まえながら詠まれていることが窺える。その上で、伝統的な「恋の詞」に卑近な日常生活を表す俳言を詠み合わせることで、日常生活の中の恋を描くことに成功している句例も、先に取り上げたようにいくつか見いだすことができた。

さらに今回調査した芭蕉一座歌仙において用いられていた俳言の「恋の詞」十三語を撰集別に示してみると左のようであった。

「孕む」「嫁（よめり）」「かぶろ」「娘」「粧ひ」「高雄」（『冬の日』）
「女子（をなご）」「小町」（『猿蓑』）
「娘」「嫁」（『炭俵』）
「嫁」「後呼（のちよび）」「娘」（『続猿蓑』）

出産に関連する「孕む」や、近世風俗である遊里に関わる「かぶろ」「高雄」といった俳言の「恋の詞」が用いられているのは『冬の日』収載歌仙のみであり、残りの俳言の「恋の詞」は、「娘」（三句）、「嫁」（二句）「女子」「後呼」など、登場人物の女性の社会的立場や婚姻関係に基づく口語的な呼称が多くを占めていた。とくに『炭俵』『続猿蓑』に収載される晩年の歌仙作品においてはその傾向が顕著である。これらの語句は俳言の「恋の詞」としても卑俗性や当世性が薄いものであり、先の「恋の詞」の分類において項目を立てた「身体関連語」や「漢語（音読み語）」に属する俳言の「恋の詞」の用例がまったく見られないこととも合わせて、芭蕉一門が目指した恋の句のあり方をよく示すものとなっていると言えよう。

以上、「恋の詞」に注目することで、近世初期俳諧における「恋」の捉え方を明らかにするとともに、蕉風俳諧の恋の句の特色を探ってみた。その結果、近世初期俳諧における「恋の詞」には、雅語の「恋の詞」と俳言の「恋の詞」とがあり、俳言の「恋の詞」には、和歌や連歌では見られない身体、社会、風俗への強い関心が窺える詞が含まれていることがわかった。また、蕉風俳諧における恋の句は、通説とは異なり「恋の詞」を用いた句が多くを占めており、「恋の詞」の中でも特に雅語による伝統的な「恋の詞」が多く用いられていることが明らかとなった。そして、蕉風俳諧とくに芭蕉の恋句においては、雅語による伝統的な「恋の詞」と日常卑近な俳言とを取り

合わせることで生活実感を伴う恋が詠まれる例や、「恋の詞」を用いずに恋の場面を描き出すことで恋が詠まれる例などが見え、そこに蕉風俳諧の恋の句の新しさ、詩的達成への取り組みを見ることができた。

今回は、「芭蕉七部集」収載の芭蕉一座歌仙十六巻のみを対象として検討したが、今後は芭蕉が一座する連句作品全般を広く取り上げて検討し、蕉風俳諧における恋の句の特色についてさらに追求していきたい。

注

（1）同時期に出された俳諧詞寄せ、作法書類のうち「恋の詞」を取り上げていなかったものには、次の九種があった。

『山の井』　季吟著　正保五年（一六四八）
『かたこと』　貞室著　慶安三年（一六五〇）
『俳諧小式』　元隣著　寛文二年（一六六二）
『増山の井』　季吟著　寛文三年（一六六三）
『類舩集』　梅盛著　延宝四年（一六七六）
『俳諧鼻紙袋』　著者不明　延宝五年（一六七七）
『五節句』　順也著　元禄元年（一六八八）
『真木柱』　挙堂著　元禄十年（一六九七）
『俳諧暁山集』　芳山著　元禄十三年（一七〇〇）

（2）ここに挙げた十種の俳諧作法書類に掲載の「恋の詞」を五十音順に配列し、その収載書とともに示したものとして拙稿「「俳諧詞寄せ類に見る「恋の詞」一覧」（『俳文芸』二十一号、昭和五十八年六月）がある。

（3）『毛吹草』には「俳諧恋の詞」と「連歌恋の詞」とを分けて載せているが、これについて「連歌恋の詞」を連歌のみに用いる「恋の詞」とし、「俳諧恋の詞」を俳諧のみに用いる「恋の詞」とする解説を見かけるが、『毛吹草』において「連歌恋の詞」と分類された語句を他の俳諧作法書類においては俳諧の「恋の詞」として掲載していることからも、そのような理解が成り立たないことは明らかである。『毛吹草』における「連歌恋の詞」は「連歌以来用いられている恋の詞」、「俳諧恋の詞」は「俳諧以来用いられている恋の詞」の意として、ともに俳諧で用いる「恋の詞」と捉えるべきだと考える。

（4）東明雅氏「恋の詞」（『俳文学大辞典』角川書店、平成七年十月）

（5）恋句の認定は新日本古典文学大系『芭蕉七部集』の注解に拠る。また、芭蕉の恋句の解釈に当たっては、同書のほかに、東明雅氏『芭蕉の恋句』（岩波新書、昭和五十四年七月）などを参考にした。

（6）新日本古典文学大系『芭蕉七部集』における上野洋三氏の注解では、「聟」「状」を恋の詞として取り、この二句を「用語の上でのみ恋の扱い」とする。ただし、本稿第一節で取り上げた俳諧作法書類十種での扱いを見ると、「むこ入り」は「恋の詞」だが、「聟」は『はなひ草』『俳諧番匠童』において「恋の詞にあらず」とされている。また「恋の詞」として「状」の語を掲載する俳諧作法書類は見られなかった。したがって、本稿では「恋の詞」を用いない句として扱うこととした。

〔付記〕本稿は東京大学国語国文学会公開シンポジウム（平成二十三年四月十六日、東京大学）における口頭発表「俳諧における〈恋〉」の内容に基づきまとめたものである。発表前後を通じてご教示いただいた諸氏に厚く御礼申し上げる。